

3-1 一般市民における補完・代替医療利用の状況について

○渡邊聡子¹、佐藤雅子¹、小笹晃太郎²、
今西二郎¹

1 (京都府立医大微生物)

2 (京都府立医大老化研)

〔目的〕わが国における一般市民の間での補完・代替医療への取り組み状況をみること。

〔方法〕1999年秋、京都市の3つの町内会の組長を通じて、町内会の所属する市民計472名に自己記入式アンケート調査を配布し、記入後、各組長に回収してもらった。

〔結果〕代替療法を一つでも行っている者は、全体で61%であった。最も多かったのは、あんま・マッサージであり、36%の人が実施していた。次いで漢方、健康食品、鍼が多かった。

漢方の入手法について調べたところ、病院や診療所で処方してもらうのが42%、薬局で、医師の処方なしに手にいれている者が44%で、ほぼ同数であった。

代替療法を行っている目的について調べてみたところ、漢方、鍼、灸、あんま・マッサージ、カイロプラクティックなどは、80%~90%が疾患の治療を目的にしているのに対し、健康食品は、健康増進を目的としている者が多かった(55%)。

職業、学歴、年収、年齢別、性別などについて各療法の実践状況を調べてみたところ、職業、学歴、年収、年齢別については有意な差はみられなかった。性別では、どの療法についても女性の実践の割合が男性に比べて有意に多かった。

〔結論〕アメリカでは、補完・代替医療利用者は高学歴で高収入の、社会的地位の比較的高い若い層に多いという結果が出ていたが、われわれの調査では有意な差はみられなかった。つまり、日本ではアメリカとは異なり、年齢や学歴に関係なく、さまざまな人々が幅広く補完・代替医療を利用していることがわかった。女性の実践の割合が男性に比べて有意に多いのは、他のほとんどの国でもみられる特徴である。

以上のように、代替療法は現状では多くの市民が実践していることが明らかになった。